
ワイン＋トニックウォーター

理尚はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワイン＋トニックウォーター

【Nコード】

N1317F

【作者名】

理尚はじめ

【あらすじ】

西條と付き合うことになった彩花はそれを周囲に隠し続ける。きつと別れる日がくるから。それは遠い未来ではなく……。ムーンライトノベルズ掲載『これって恋ですか？年下の悪魔』の続編です。一見幸せそうだけどまだまだ不安定な関係に、別の悪魔が現れて揺さぶりをかけます。甘い誘惑の囁きは二人の絆を深めるのか、破局を招くのか。

ワイン＋トニックウォーター 1（前書き）

全面書き直しをしていたらかなり時間がかかってしまいました。やっぱりこのメンツにドロドロした陰惨な空気は似合いませんでした。若干不道德かもしれないけど、明るく展開していく予定です。どうかリラックスして楽しんでください。

待っていてくださった皆さん、ありがとうございます。申し訳ないくらい遅くなってしまって・・・。

大筋は完成しているのでチェックしながらUPしていきます。励みになりますので、感想、ご意見等ありましたら、たくさんください（^^）。

ワイン＋トニックスウォーター 1

西條は笑顔だ。

「そろそろ公認の仲になるのもいいですよね」

天真爛漫な笑顔――西條紘はその気になればどんな無害な表情も作り出せる。泣いていた子供も思わず笑い返してしまうような。それを、度々スカウトを受ける整った顔でやるから始末が悪い。

志賀彩花は思わず見とれ、うっかり頷きかけた。

「よかった――」

「――よくない。ちょっと、やめてその顔」

「失礼ですね」

公認？

「冗談じゃない」

「冗談じゃありません」

明るく爽やかな口調の奥に並々ならぬ決意が潜む。

「もう我慢も限界です」

二人は西條の部屋にいた。

彩花のアパートではすっかり公認の仲になったせいで人目を引きすぎた。古いアパートのわりに壁が厚いが、それでも周囲がわくわくと窺っている中二人で部屋に消える勇気が彩花にあるはずがない。最近では西條が彩花を訪ねても、もっぱら大家を交えてお茶を飲むくらいだ。八十歳を越えても元気なババ様は、アパートの住人を孫のように扱って保護している。試験官のような凝視も西條はにこやかに受け流しているけど、彩花には針のむしろだ。

「先輩が気にする理由はわかるけど」

「そう？」

彩花は最後まで言わせずそっぽを向いた。常識的に考えても分が悪いのは承知している。だからこそ強気でいかなければ。

西條が手にしていた雑誌を放り出した。
空いた手が彩花の手首を掴む。

「少しはおれの気持ちも考えてください」

甘いお菓子みたいにおいしそうな男。

人形じみて整った顔立ちに表情の豊かさが魅力に沿えている。すれ違う女たちが思わず立ち止まって振り返り確かめてしまう――。

彩花は指先で信じられないくらい長い睫毛をつついた。

「先輩ごまかさないで」

「なんか作り物みたいだなーって思って。これつけ睫毛よりきれいなね」
くるんとカールしているわけではないが長くて艶々だ。うらやましい。

「なんか目元だけだと女の子みたい。外国の。西條、今度女装とかどう？」

忘年会の余興にでも。

「じゃあ先輩がタキシード着てください。おれは白いドレスで、人前結婚しましょう」

「ふざけるなよ西條」

「先輩こそ」

甘い恋人たちの夜が一転、戦闘状態に陥ってしまった。

「あのね、社内恋愛って難しいの。別れたあとのことを考えないといけないでしょうが。西條はいいよ。付き合ったこともなんで？って思われるだろうから、別れて当然って皆思うけど。」

わたしは身分不相応に調子にのって棄てられたバカ女って嘲笑われなきゃならないのよ」

西條は社内アイドル並み人気だ。若くて美形で仕事ができる。その上性格だっていい。これに目をつけないなら女じゃない！という超優良物件なのだ。

一方彩花といえば地味で目立たず西條より年上、仕事にのめりこむ癖があり部内では『怖いサポート』と呼ばれている。

吊りあわないにもほどがある。軽蔑を通り越して、妬まれ嫌悪さ

れ誹謗中傷の嵐に放り込まれるに違いない。付き合っている間はまだいいが、別れた後は？

そんな地獄に一人で耐えるくらいなら。

「黙っているほうが百倍ラク。っていうかバラすメリットないけど？」

冷ややかくに視線を流せば、西條も冷たい目つきで首を振った。

「どうして別れた後のことを心配するんですか。それこそ意味がない」

「堅実さが無意味？」

西條の双眸がぎらりと光った。

ワイン＋トニックウォーター 1（後書き）

読みやすいように、一話を短くしています。
逆に読みにくい、わかりにくい等ありましたら教えてください。

ワイン＋トニックウォーター 2

あ、ヤバいかも。

でもここで引いたら生き地獄が待っている。彩花は内心びくびくしながらも顎を突き上げて睨み返した。

「……もう、いいです」

先に折れたのは西條だった。

深々とため息をつくとき苦笑を浮かべて、

「もう少し待ちます。」

多分おれが悪いんですね。先輩を安心させてあげられないおれが

「違う。それは違う……けど」

「そんな顔しないで」

西條の腕が伸びてきて彩花を浚った。

抱きしめられてこめかみや頬にキス。優しい唇に、彩花は柄にもなく胸元に指を絡めてしがみついた。

「秋元商事のお嬢様の噂聞いたよ」

大手取引先の一つだ。社長の次女が西條を気に入って見合いを申し込んできたとか。西條はコネ入社じゃないし後ろ盾もないから、実際身一つで出世レースを戦わなきゃならない。勿論西條の実力はサポートの彩花が一番わかってる。でも秋元商事と血縁関係が出来れば、使われる側から使う側に一気に昇り詰められる。

「結構美人らしいし——」

「断りました」

西條は彩花の髪に指を通しその感触を楽しんでいる。

「なんでこんな柔らかくて気持ちがいいのかな」

「大事なことなのに」

「全然。」

おれは先輩と付き合っている。他の女性と見合いなんてする必要

ありますか？

もし先輩に振られたとしても、傷心のおれに他の相手を求める力が湧くはずがない。つまり他の女なんて、おれには一生必要ない。だいたい相手の迷惑も考えずに行動する人間は嫌いです」

西條はにっこりと笑った形の唇で彩花の唇を軽くすくい上げた。

「先輩だったら絶対にそんなことしない。でしよう？」

信じきった瞳に熱く見つめられ、彩花は慌てて顔を伏せた。

「したくたってできない。わたしは何も持っていないし」

西條のプラスになるものは何も。

でもマイナスになると自覚しながら関係が続けるのも傲慢な行為じゃないだろうか。

「ねえ先輩、おれが一番欲しい物を教えてあげましょうか？」

彩花は目の前にある胸に頬をつけた。すらりとして見えるのに硬く引き締まった身体、その奥の鼓動が浸み込んでくる。西條の暖かさ匂い——同じボディソープの——に包まれていると泣きたいような切なさが込み上げてきてしょうがない。

「見合いしなかったらクビって言われたら？」

「退社しますよ。会社は一つじゃない」

「転職の邪魔されるかも」

「だったら会社を興します。付いてきてくれますか？」

本当に出来ちゃいそうなのが西條の怖いところだ。彩花は込みあがる愛しさをこめて精一杯の力で抱きしめた。

「つける薬もない」

ワイン＋トニックスウォーター 3

彩花は木造のやたら古いアパートに部屋を借りている。安さと治安の良さ、トラブルのなさが長年居付いている理由だ。大家の主義で住人は女性に限られている。そしてそれは町内住が知っている。空き巣に狙われそうなものだが、駐在さんは頻繁にパトロールしてくれるし、町内の男たちが目を光らせている。警備会社と契約しているより安全だ。大家がアパートの住人たちを娘のように扱うから、町内もそれに倣う。彩花たちは町内中の娘みたいなものだ。

残業で遅くなった彩花が最寄り駅の改札から出ると、商店街は店じまいの時間にかかっていた。

「おう彩花。こんな時間まで仕事かよ」

作業服姿の兄さん、といっても彩花より若い。今年でたしか二十歳のはずだ。頭は金色、顔と腕に大きな傷が目立つ様は、いますぐタイマン勝負だ、ゴロまきだと走り出しそうだ。もっとも傷跡は中学時代のヤンチャの名残で。現在は町内の足立工務店勤務、当時の周囲の予想を裏切って三年も続いている。

彩花はまだ少年の面影の残った顔の赤みに笑った。

「ジュンはもうご機嫌ね。飲む過ぎるなよ」

「酒は加減がなー」

人氣が少なくなった商店街を二人で並んで歩いていく。この時間看板でないのは飲み屋くらいだ。

彩花はふと隣を見上げて驚いた。

「背、高くなったねえ」

「前からじゃね。オレ、ガクチューのとき百七あったし」

「でもほらひよろひよろしてたから」

「あー、まー、資材や鉄筋かついでっからな毎日」

「えらいよね」

「なんで。仕事だろ、普通じゃね」

「建築士の資格目指してるって聞いたよ。昼間働いて夜定時制って大変だろうなあ」

「オレ馬鹿だからさ。取れるかわかんねえけど。」

——今の男って年下ってマジ？」

唐突な話題転換に一瞬つんのめりそうになった。西條がこの界限に顔を知られているのは本人が進んで暴露したからだ、できれば羞恥心を身につけて欲しいと切に願う。

「彩花って年下OK？」

「下っていつでも一歳だけでさあ……なんか犯罪者を見る目で見るのはやめてください」

「見てねえって。聞いただけじゃんかよ」

「あ——あれ、ジュンごめん。送ってくれなくていいよ」

話していて気づくのが遅れた。もうアパートの近くまで来てしまった。

「別に送ってねえし」

「ジュンの家反対方向」

「……。あのさあ、あんたマジそういうところ可愛くできねえのな、っていうか、別にそういうのも悪かないけど……やっぱいいや。」

ここまで来ちまったから最後まで行く。ほら歩け」

「ありがとう」

なんだかわからないが。

「ジュンは優しいね。町内の人みんな優しいかも。遅い時間に行き会おうと、駅からアパートまで送ってくれるもの」

「誰だよっ？」

おおっ。その剣幕にびっくりだ。

「誰って——だから、皆？」

駅前商店街以外は住宅地で、夜遅くなると人通りも途絶えてしまう。女の一人歩きはさせられないんだぜ！が下町のよさだと思う。

「油断すんなよ。あんた、わりとぬけてんだからな」

「町内の人に警戒してどうするの」

「わかんねえだろヤロウなんて。気をつけろよマジで。」

なあ、今度の日曜――」

彩花はふと顔をあげて、眉を顰めた。

部屋に灯がついている。カーテンを通してぼんやりと明るい。二階だし、隣近所皆顔見知りで、防犯のために照明を就けっぱなしにする必要もなく。電気代だってもったいない。

「消し忘れたかな。」

送ってくれてありがとう。今度工務店の方になにか差し入れもつていくね」

「お――おう。うまいもんにしろよな」

彩花が階段を上がってドアの鍵を開けるまで立ち去らずにいる。このヤンチャ少年を現役時代から知っている者としては成長ぶりが嬉しい。

彩花が手を振ると、踵を返して歩き去っていったが、なぜかその背中では名残惜しげで寂寥感さえ漂っていた。

酔いが醒めて寒くなったのだろうか？

ワイン＋トニックウォーター 4

彩花は玄関の扉をあけて、そこにあった物に首を傾げた。

キャリーバッグ？

彩花が借りている部屋は玄関を開けるとキッチン兼ダイニングがあり、奥のドアの向こうが寝室だ。畳に布団という驚きの純和風さ。それはともかく。そのドアがいきなり開いて長身の青年が顔を覗かせた。

「おかえり」

淡い色の髪と瞳、すっと通った形よい鼻梁、くつきりとした唇、長身痩躯――。

「誰？」

彩花は西條そっくりの男を前に絶句した。

「西條の身内の人？」

他人の空似はありえないくらいに似ている。

「いや――いやいや、それより、どうして留守中に部屋にさがりこむわけ？」

常識ある社会人ならその点を気にしなくては。青年の行動は空き巣とも言える。見知った顔につい警戒心が緩んだが。

「大家のお婆ちゃんが誤解したみたいでさ。オレをコウだって。あんたは間違わなかったな」

にやっと笑った顔が西條と違う。

西條の笑顔はもっとこう――、こう……ここまで悪人面ではない。根っからの善人でもないけど。

「どうも始めまして。西條春臣です。コウの兄。つつうか双子だから年齢差はないけど」

「双子？」

「うん」

一卵性双生児に違いない。顔立ちはほぼそっくり。性格の違いの

現われだけみたいだ。春臣の方がワイルドな感じがする。

彩花は春臣の全身を指さして辿った。

「その特徴がないのが特徴的なダークスーツと、玄関のキャリアバツク。もしかしてパイロット？」

「大当たり。国際線の」

「うわ………」

医者、弁護士に次いで人気の高い特殊系専門職に、この外見で。周りの女性陣が大変だ。日々激戦を繰り広げていることだろう。不誠実そうなこの男を相手に。

西條の兄弟だというのに、なぜか彩花は落ち着かなかった。警戒心が鎌首を擡げる。野生のカンが、こいつは危険人物だと告げっていた。

ワイン＋トニックウォーター 5

「用件は？」

「お茶どうぞーとかなし？」

愛想ないな。

コウから家の話って聞いている？」

「――若干」

縁を切りました、と言っていることくらいか。

あ、どうなんだろう、この兄とは。

今まで西條の口から双子の兄弟がいるなんて一言も出ていない。

西條は決して短慮な人間ではないから実家と疎遠になるにも深い事情があるのだろう。だから彩花は西條が話す気になるまで無理強いをしたくなかった。

とはいえ、聞きたくないと春臣を放り出すわけにもいかない。

春臣は肩を竦めた。

「その顔は聞いているな。不仲なんだよコウと家。大学でこっちに出てから一度も帰ってこない」

「仲を取り持てってことなら、わたしは西條本人の問題だと思うけど。西條は子供じゃない」

「へえ」

春臣は、気に掛かるような含みのある笑い方をした。

「なによ」

「コウも面白い女と付き合ってるんだと思って
本人相手に言うか普通？」

留守に上がりこむ非常識さといい、なんだろうこの男。

「年上だって聞いたからな。何でもしてやりたい、庇って甘やかしてやって、猫かわいがりしているの想像してた」

「会社の人間が聞いたら笑い死にしそう」

「プライベートでは？」

甘やかしているのは西條の方だ。

しかしながら、恋人の兄であろうと付き合いの一部始終を報告する義務はないだろう。彩花はにっこりと笑って口を噤んだ。

春臣は肩をすくめた。

「ま、いいけど。」

用件は親父が跡継ぎ問題でやきもきしている。そろそろ決めないと、ってこと」

「跡継ぎ問題？」

彩花は呆気にとられた。

「……何も聞いてない。継承が問題になるような家なの？」

春臣は哀れむような目で彩花を見た。

「本当に恋人なのか？」

寺だよ。檀家も多いし、資産もある。坊主としての年収だけで三、四千万くらいか」

「……単位は円で？」

「他に何があるってんだ？」

寺を継いで、親父が死ねば不動産も受け継ぎ、そっちらからは年間億単位の収益があがる。地方都市だけど檀家には名家も多い。地元の名士って奴だな。地元選出の議員が季節ごとに頭下げにくるくらい」

「お寺さんって儲かるんだ……、ってそれはどうでもいい。西條は実家が嫌い。つまりお寺を継ぐ気もない？」

ほら、お坊さんになる修行とかしてないし、もう無理でしょう。

あなたが継げば？」

西條と違い、物欲が凄そうだ。

「修行も資格もいまからで十分間に合う」

春臣は腕を組んで片方の眉だけを高く吊りあげた。気分を損ねたようだ。

「パイロットになるのがどれだけ大変か、あんた知らないだろう。よく簡単に言えるな」

「ごめん。でも——」

「でも？」

「あなた、お金好きそう、だから」

正直言って。

それに旅客機のパイロットは健康面でほんの僅かなトラブルが発見されても地上勤務に回されるらしい。狭き門で特殊技能職、花形ではあるけれど、寿命も短い。

「あんたにコウを説得してもらうつもりだったけど、その様子だと無理そうだな」

と、春臣はため息をついた。

「本人が嫌がっているのに、どうしてそんなことしなきゃならないの」

「恋人がただの会社員より、資産家の跡継ぎのようが良くない？」別に。

「お金とは縁のない生活しか知らないから」

庶民なんてきつとそんなものだ。特別向上心旺盛な人間もいるだろうけど、彩花はその辺り実に平凡な感覚だった。だいたい恵まれすぎた男西條がこの上財産まで手にしたら、彩花とは完璧世界が違ってしまうではないか。

「春臣さんも継ぎたくないわけ？」

「積極的には。資産は歓迎だけど、由緒ある寺だの歴史だのはめんどい。金にしたって今の仕事で十分稼げるし。」

親父はコウに継がせたがっている。あいつの方が優等生で安心して任せられる。オレがはっきり拒否れば、コウは強制的に連れ戻されるな」

「そんな……」

落ち着け。落ち着いてよく考えよう。

西條はあれで優しいから、親が強引に出たら逃げられないかもしれない。

彩花は縋るように春臣を見つめた。

「消極的には継いでも良いつてこと?」

「考えてみてもいい、くらい」

「じゃあ考えて」

春臣はそれには答えず、彩花の横を通り抜けて玄関に下りた。

「また話そうぜ。連絡する。コウの選んだわりに、あんたいい女だな」

ワイン＋トニックウォーター 6

双子の兄の襲来を受けた翌日、西條と話したいのにタイミングが悪かった。西條はほとんど外回りで、彩花は別の社員の仕事に掛かりきりだった。

「海老名、朝言ってた資料まとめたから確認して。次はプレゼンのコンセプトレポートかメモちょうだい。データ作っちゃうから」

「まだ……もうちょっと待ってください」

「まだ？」

朝からかかって、もう定時なのに？」

一体なにをしていたんだ一日中。

「少しは焦れ。明日だよプレゼン」

こっちは死ぬ気で間に合わせようとしているのに。三十分ごとの時間配分で考えて、あと八——九時間あれば完成する予定になっている。

「彩花さん、お願い……」

「ダメ。そこまでわたしがやったら海老名の仕事じゃなくなっちゃう」

企画に来て一年目でまだ不慣れなのはわかるけど。サポートにそこまで頼ったらだめだ。

元々この青年の担当は彩花ではなかった。

担当のサポートスタッフがお手上げ状態になって、別チームの彩花が補助に呼ばれた。つまりは補助の補助に丸投げしてどうする。

「でもまとまんない物は仕方ないじゃないすか」

「ふてくされるな」

思わず頭をはたきたくなる。

学生気分が抜けてない？

でも男なんてみんなこんな感じだ。普段は甘ったれていても、ここぞという時に真価を発揮できるならそれでいいと思う。

彩花がいる企画部は社内でも有名くらい仲がいい。和氣藹々というか、裏表がないというか。忙しさに煽られ罵声も飛び交うが後に響かない。

一発殴っておくべきか。根性入れるために。固めた拳に息を吹きかけた時、

「彩花さん、受付から。来客だって。行っただけ」

電話をとった部長が彩花を呼んだのを機に、あーっと脱力して机の上に伸びた海老原の頭を今度こそ心置きなく叩いた。

「戻ってくるまでにやっちゃって。今夜帰りたかったらエンジンの回転数あげろ」

海老名がさっさと働かないと彩花だって帰れない。ここ三日ばかり終電が続いている。明日で終わりだと思えばこそ頑張れたけど、海老名のあの様子じゃあ――。

一階の受付があるフロアに降り立って、そこで彩花の足がぐくんとエンストしたみたい之急停止した。

「春臣さん、なんで……。西條に会いにきたの？」

「まさか」

何故まさか？

逆に、他にここにくる理由があるのだろうか。当社は広いジャンルに手をだしているが、航空事業にはノータッチだ。社長の専属パイロットでも募集しているとか？

自家用ジェットを買えるほど儲かってはいないはずだけど。

春臣は長身を曲げるようにして彩花に顔を寄せ耳元で囁いた。

「あんたに話がある」

「悪いけど、いま時間がない。仕事が――」

「すぐ済む。」

オレが家を継いでもいい。ただ条件がある」

「条件？」

「あんたにしかできない」

どうして西條家の後継者問題に、赤の他人がそんな重要度で関っ

てしまうのだ？

「一応聞いただけ聞くけど、なんだか嫌がらせの匂いがする」
春臣は笑った。

風邪をひく前の悪寒のように、背中がぞくぞくした。

意味深な笑みを浮かべる春臣から視線をもぎとるように外し、彩花はそっと振り返った。

「……………」

外回りから帰ってきた西條が二人を見つめていた。

ワイン十トニツクウォーター 7

「二人は知り合い？」

「まずい。まずすぎる。」

このタイミングで春臣との関係がバレるのはまずい。関係といえる物だけの状況に至ってはいないけど、実家の問題に勝手に片足突っ込んでしまったわけだから。

進んでじゃないけど、春臣が押しかけてきたわけだけど。――だめだ、口出してる。春臣に実家を継いで欲しいと頼んでしまった。

春臣は態度をころりと変えて、彩花など存在していないかのよう
に西條だけに目を向けた。

「お前に会いに来たらいなくて。同じ課の人に降りてきてもらった。えーと？」

「……っ、志賀彩花です。はじめまして」

「いつも弟が世話になっています。これよろしければ皆さんで。お口汚しですが」

人が変わったような、さすが寺の息子といった口調、物腰、きれいな日本語。どこに持っていたのか菓子ของ包みまで差し出した。

彩花の方は動揺しまくっているのに、落ち着き払って平然としている。さすが西條と同じ血が流れているだけはある。神経が図太い。彩花は受け取った紙袋を両手で盾のように支え、じりじりと後退し始めた。

「えー、じゃあわたしは、仕事に戻るの、えーと西條さん？」

「え、うん。ありがとうございます。でもおれも戻るよ。」

「ハル、仕事中だから。また今度」

西條の態度は随分そつけなかった。普段は外部に対して何があるうとさわやか好青年のスタンスを崩さない役者なのに。無表情で踵を返して、彩花を追ってその場を立ち去りかけた。

西條を引き止めたのはたった一言だった。

彩花も背中ですれを聞き、思わず振り向いてしまった。
「親父が倒れた」
そんな……っ。

ワイン＋トニックウォーター 8

西條は立ち止りはしたが、何も感じていないようだった。

「戻って欲しがってる」

「おれには関係ないよ」

「寺はどうする。親父はコウに継がせたがっている。オレが拒否すれば逃げ道はないぜ。代々受け継いできた住職の地位や檀家を放り出す気か。母さんが墓の下で泣くな」

西條の背中越しに、春臣の冷淡な笑みを目の当たりにした彩花は、その言葉が自分に向けられているかのように感じた。

春臣は言いたいだけ言うとおっさりと帰っていった。

オフィスに戻る途中西條は無言だった。

エレベーターでは偶然にも二人きりだったのに。

彩花は天井近くに取り付けられている監視カメラを見上げた。

付き合いを秘密にしているということは、会社の中では恋人として役に立てないということだ。

西條を慰めることもできない。

オフィスのあるフロアの廊下を歩きながら、彩花はすぐ前に行く西條の手をそっと握った。

西條の手はびくりと跳ねた後、彩花の指が赤くなるほど強く握り返してきた。

「西條っ？」

そしていきなりの九十度右折。

二人が転がるように入り込んだのは給湯室で、西條は素早くそのドアを閉めた。

定時を過ぎていたから誰も給湯室でなんかぐずぐずしていない。今からここを使おうとする者もないだろう。西條は彩花が考えるよりも冷静でいるようだ。

西條はカウンターに凭れるとため息をついた。

「大丈夫？」

「おれ、親父とうまくいなくて。今の、おれの双子の兄です。しばらく会わないでいたら親父に似てきた。いやな奴だ」

「でもお父さんは西條を気に入っているんだよね——さっきの話だと」

「まさか。おれの方が操作しやすいと踏んでいるだけです。戻る気も、家を継ぐ気もまるでない。そんな事には絶対ならない。すみません。へんなところ見せて」

「……もうどのくらい帰ってないの」

「何年も」

西條は顔をあげると、疲れた目で微笑んだ。

「母さんが生きていれば、絶対先輩のこと気に入ったはずですけどね。そうだったら会ってもらうために帰ったかもしれない。

先輩に似てる。しっかり者っぽいのに天然なところとか。

先輩」

西條の手が彩花の両手を包んだ。

「会社ではご法度ってわかってるけど。少しだけ。元気をくれませんか」

「西條……」

確執の根は深そうだ。芯の部分でとても優しい西條の、この頑ななまでの拒絶は普通じゃない。

ワイン＋トニックウォーター 9

何でもできるからか、万人うけするその外見のためか、西條は驚くくらい前向きだ。いや自信家なのか？

望めば叶う。やってやれないことはない。が信条だ。その西條が逃げ出すって。

春臣からメールが入ったのは金曜日の定時前だった。

「海老名、ごめん。今日ちょっと都合が悪くなっちゃった」

プレゼンが無事終わったので、飲みに誘われていた。彩花の分は海老名がおごる約束で。

「えー」

「早く帰って彼女と遊べば」

「今彼女いないですもん。ホント彩花さんには迷惑かけたからお礼したくて。今度時間とってくださいよ。食事おごります。どこの店でもいいです。勿論ディナーを」

「別にいいよ。仕事なんだから」

海老名の斜め向かい側が西條の席だ。今の話聞こえていただろうなど、彩花は西條のケータイにメールした。

春臣が彩花を呼び出したのはホテルの最上階ラウンジだった。仕事用の格好では浮いてしまう。

わかっていてもそのままの格好で春臣の隣に座った。ムードを壊す乱入者を、二三の目が睨んできたが、すぐにいなくなるからぜひ許して。

スマートな動きで近づいてきたバーテンに、

「水。炭酸抜きをお願いします」

「オレとは飲めないって？」

春臣は彩花をじろじろと眺めて、唇の端で笑った。

「前も思ったけど、あんたってなんでそんな地味でやばったい格好、平気でできるの？」

「会社にはナンパ待ちではなく、仕事をするために出かけているので。」

「用件は？」

「シャンパン飲みたい。なんか、シャンパンの気分なんだよなー」

「……こいつ。」

「何、急いでんの？」

「約束でも——コウが待ってるのか？」

「……」

「週末だもんなあ。ここからコウの部屋に行って、お泊り？」

「春臣は喉の奥で笑い、押し流すようにしてグラスを仰った。」

「酒臭くなっちゃダメだな、そりゃ。」

「コウと家のこと話したか」

「——少し」

「帰る気、ありそう？」

「全然。」

あのね、詳しい事情について、わたしには聞く権利はないと思うし、もし聞くにしても西條から聞く。

言うまでもなく西條サイドだから、協力させようとかしないで」

「なんでコウサイド？」

コウが帰れば、あんな金持ちのお坊ちゃん捕まえたことになるのに。あんな部屋に住んで、実は金有り余ってるお嬢様でしたとかないだろ」

どうして未来があるように言うのだろうか。彩花はグラスの中のライムを見つめた。

後で苦しむような期待をしたくない。自分の弱さはよくわかって
いる。きれいなはずの緑色の切片はグラスの中で苦々しく浮かんで
いた。

「普通のサラリーマン家庭」

「だったらコウが金持ちの方がいいじゃん」

「関係ない」

「あんたいくつだよ。結婚考えずに付き合う年齢じゃないだろうが」
少しだけの時間でも、西條と一緒にいてくれて、それで十分だと
思わなければやっていられない。

「真剣な付き合いじゃないってことか。」

昨日の感じだと不思議はないけどな」

彩花は本気で驚いた。心からのめりこんでいるのに。時々怖くな
るくらいだ。

「どうして」

「恋人同士の雰囲気じゃなかった。」

あんたにとってコウは一時しのぎ？」

そんなわけない。

でも……。

彩花は頷いた。

「そんな長く続かないと思ってるから。こんなことに巻き込まれて
迷惑」

春臣はグラスから視線を外さない彩花の横顔をしばらく見つめて
いた。

「——あんた嘘ヘタだな。別にいいけど。」

時間が押してるなら単刀直入に行くな。オレが家を継ぐって宣言
しなければ、コウは強制連行されて無理やり後継者にさせられる」

「それは聞いた。」

わたしに出来る取引ってなに」

「オレと付き合う」

「あ——ははっ、え……なにマジな話？」

わかった。せっかく西條と再会したのに陰悪になっちゃったから、仲直りするのに付いてきてってことね」

「陰悪だったか？」

この兄弟——というか双子、大丈夫だろうか。他人より意思の疎通がなっちゃない。

「あんな怖い顔、普段はしないもの」

「へえ」

春臣には、そうでもないらしい。

どうして？」

西條は誰とでもうまくやれる。子憎たらしいくらいに世慣れた性格で。家族には容赦ないということだろうか？」

でも、付き合い始めても違和感はなかった。まさかまだ本性を隠しているとか？——それもないと思うけど。

「あのさ、一人の世界に入らないでくれない」

「ごめん。今から行く、謝りに？」

「だから、誰がそんなこと頼んだよ？」

付き合っているのは、あなたがコウとすることをオレともする。わかった？」

「頭おかしいの？」

逆に尋ね返して訝しげな視線を投げかけると、春臣は肩を震わせ
て笑い出した。

「双子と同時に付き合うの、割とラクだと思うぜ。同じ顔だから誰
かに見られてもバレないし。ほら、罪悪感も少ない」

「え……なにが？」

指先が彩花の頬を撫でて離れた。

「やってる最中も同じ顔だから」

彩花のグラスから中身の水がその顔に向かって飛んだ。

端正な顔立ちが間接照明を受けて艶っぽく際立つ。女なら誰でも
しっぽを振って付いてくるもの。春臣は傲慢にもそう信じているよ
うだ。多分それは正しいのだろう。滴る水さえ演出のようだった。

あれか。美人は性格が悪いという『ブロード美人は頭ワルイ』系
な通説を体現しているのか。それともただの変態か。

どうでもいいけど、一生会いたくなかった。西條の肉親が、それ
も同じ遺伝子を分け合った片割れが地球外生命体並みに理解不能な
生き物なんて。

彩花は恋愛関係におけるぐちゃぐちゃした愛憎劇が大嫌いだ。ど
うせなら楽しく始めて楽しく終わりたい。

春臣はトラブルを望んでいる。

彩花が受け入れるはずが無いとわかっていて、波乱を楽しみたい
がゆえにこんな条件を突きつけてきたのだろう。

『他人の苦しみは蜜の味』と平気で言いそうなタイプだ。

「遅くなってごめん、西條？」

「こっちです」

西條はバスルームにいて――掃除中だった。

「なんで？」

仕事から帰って早々。

寄り道はしたけど、彩花の方が早く会社を出たから時間はそう変わらないはずなのに。

「先輩、今週忙しかったでしょう。」

花屋にこれがあったから」

西條は観葉植物を指差した。

「バリ風にしてみました。入浴剤はココナッツとカモミール。疲労回復と美肌のW効果。それとも花風呂がいいですか」

籠には赤とピンクと白の花びらが山盛り。

「いい匂い」

「バラと芍薬です。花の匂いって自然でいいですね。人工的なと全然違う」

彩花が持っていた籠に、西條はそう言っ顔を寄せた。

長い睫を伏せて微笑む瞳に見つめられ、彩花はかあつと頬を染めた。

「先輩もいい匂いだけど」

花びら越しのキスに、彩花は目を閉じて広い背中を抱きしめた。

「せっかくだけど」

「温泉風がよかったですか？」

外しちゃいましたかと呟く西條を、彩花はじつと見上げた。

多分、今すぐくへんな顔をしていると思う。目は潤んでいるし、赤くなって、……いやらしい顔になっている。

ワイン＋トニックウォーター 12

聡い西條はすぐ察してくれた。

食事と省き、二人でシャワーを浴びてベッドに雪崩こむ。十代に戻ったみたいな性急さだった。

ろくに拭かずにいた身体はすぐに熱を帯びて、お互いの肌を滑らせる湿り気がお湯なのか汗なのかもうわからない。

声にならない叫びをあげて、夢中でしがみつこうと背中に回した手を剥がされた。西條の髪が首筋を擦る。無意識に身をよじって逃げかけると、片手で両手首をつかまれ頭の上で押さえつけられた。

暗闇で貪欲な獣の目がきらめいた。

「似ていましたか」

「……」

「そっくりだったでしょう。見分けがつかないってよく言われました。どっちだって同じだって」

「……わかるよ」

強くて美しい獣が、何でも自由にできる立場にいるはずの西條が裸で無防備に押さえつけられている自分よりも弱い。彩花は抱きしめたくてたまらなかった。怖がらなくていいと、誰にももう傷つけさせないからと。

「多分、わかる。西條のこと間違わないから」

「本当に——？」

西條は迷子のような顔で尋ねた。不安が滲む、おずおずとした声で。

「親の見舞いにも行かない薄情者だと軽蔑しませんか？」

「事情があると思うから」

「わけは訊かない？」

「話したくなったら、話して」

腕が解放された。代わりに西條の身体が重なってきた、熱い重さ

が彩花をベッドに沈めた。

「――信用されてるんですね」

「してるよ」

「先輩の身体、気持ちいい」

重なった体の間に差し込まれた手が彩花のふくらみを包むように蠢いた。指の間から覗いた先端も刺激にきゅっと硬く尖る。

西條は手での悪戯を続けながら、甘えるように谷間に顔を埋めた。乳白色だった肌が上気して薄い桜色に染まっていく。

「先輩になら殺されてもいい」

吐息交じりに囁かれて彩花は息をつめた。熱い息が、ぴんっと尖って疼く先端を掠めたからだ。

「んんっ……………あ、や……………舐、ちゃ……………っっ」

不安は完全には西條の中から消えなかったようだ。この夜の西條は溺れるものがしがみつくように執拗に彩花を貪った。

ワイン＋トニックウォーター 13 (前書き)

内容的に年齢制限が必要？

判断が難しいので、反応によってはムーンライトノベルズに移るか
もしれません。

普段から西條は相手を感じさせることに熱心だ。濡れてもいないところにいきなり入ってきたことなど一度もない。

西條を受け入れたとき、彩花はもうどろどろになっていた。何度か一人だけ達かされたせいで、そこは滴るほどに濡れて痙攣していた。別の生き物のようにびくびくつと西條に絡みつく。

「はっ……ああ……ん、んっ……っっ」

自分ではどうしようもなく勝手に動き悦楽を求める身体を、唇を噛み締めて耐えようとする。

西條はその唇に指を這わせた。

「だめです。声、聴かせて」

「や……いや……あ、こん、……な」

西條は緩やかに動いているだけなのに。

くちゅ。じゅ……ちっ……、と濡れた音が途切れない。

「すぐく——熱い」

「……っっ」

腰が跳ね、全身が硬直した。引き絞られた中で西條の動きが止まったのがわかった。熱湯のような熱いものが中に広がる。達したばかりで敏感になっている内壁がその熱さにさらにひきつく。

彩花は西條の首や肩に回していた腕に必死に力を込めた。気を抜くとずるりと剥がれてしまいそうなそれはぶるぶると震えていた。

「……な……中、きも、ち……い、熱いよ……もっと、いっぱい……っ」

西條の身体に力がこもったのがわかった。

耳元で低い声が呻き、耳朶を噛んだ。

「煽りすぎ。無茶しますよ」

放ったばかりでも堅いままの西條が今度は激しく動き出す。

彩花は言葉にならない悲鳴をあげた。

翌日は動けなかった。倦怠感と筋肉痛で。

西條が嬉々として面倒を見てくれたから不便さはなかったけど。

「覚えてない？」

「あまり」

彩花は首を傾げた。声もひどい。

「ちゃんと相手できた？」

質問に対する答えを待っていると、西條の頬にうつすらと朱が差した。

珍しい。西條が赤面している。

「……なにか、変な薬とか飲みましたか」

「変な薬って何」

「興奮剤とか媚薬とか」

昨夜何があったのか——というより、自分が何をしたのか。思い出したくなってきた。

「よし、昨夜のことは忘れるってことで」

「いやです。一生忘れません」

西條はきっぱりと宣言し、ベッドに上がって彩花を抱きしめた。止める間もなく勝手にパジャマのボタンを外し、胸の膨らみに指を這わせ先端の硬い蕾にいたずらをしかける。

「……っ」

散々虐められたらしいそこはまだ赤く腫れて敏感なままだ。

「やめ……っ」

「身体の相性は初めからよかったけど、慣れてきたのかな。もっともっと良くなるといいですね。もう、すごい可愛かったですよ。昨夜の先輩。一生このままベッドから出さずに抱いていて、閉じ込めてしまおうかと思った」

「……あ、くっ……ん」

「なんでそんなに優しくしてくれるんです」

「え……？」

西條は答えずに無言のまま微笑んだ。ウエストを抱いて顔を胸に近づけると、微笑みを浮かべた唇で疼く先端を挟んだ。燃えるように熱い舌が、感じすぎて震えている突起を柔肉に押し込むように舐めまわす。

「真っ赤ですね。噛んでもいい、痛くないから」

「が……願望、を実行、中……っ？」

「うん。今日はベッドから出しません」

肩を押しのけようとしても元々腕力差がある上に、今日は全然身体に力が入らない。

彩花は西條が望むままに甘い悲鳴をあげ続けた。

籠もりきりだった週末が終わる頃、西條は一度だけ家族についてふれた。

「春臣に近づかないように。見た目はおいしそうでも中身は腐っていますから」

「そこまで言うか……」。

とは思ったが、口には出さず頷いた。

出会って二日で、早くも春臣を『不愉快な奴』と認定していた。

その春臣と長らく兄弟、それも双子を強いられてきた西條にもそれなりの言い分があるはずだ。

外出から戻ってきた彩花は、一階ロビーのただならぬ混雑に目を見張った。

テナントで入っているカフェが新作でも出したのだろうか。

自社ビルではあるが、一階はセキュリティの問題上あまり有効活用できないらしい。がめつい経営陣は広々とした空間にわけのわからぬオブジェを置く代わりにテナントを募集した。中の一軒はカフェで、これはロビーで接客をする際とても役に立ってくれている。扱う飲み物は豊富だし、サンドヴィッチには定評がある。オフィス街に位置していることもあって昼時には客が詰め掛ける。

戻るついでに三時の差し入れをと彩花は携帯電話を取り出した。

部長に許可を貰うためだ。勿論自腹を切る気も余裕もないので、狙いは上司の財布だ。その肩を後ろからきれいにマニキュアをした手が叩いた。

「先輩」

振り返ると最近企画部に配属されたサポートのジュリアがすぐ後ろに立っていた。黒々と艶やかに波打つ髪とローストアーモンド色の肌が宝石のような、日本とブラジルのハーフ、男共に気後れして近づけないと評判のゴージャス美女だ。彩花より年下かつ入社時期も配属も後ということで『先輩』と呼ぶ。

呼ばれるたびに否応もなく年上である事実を突きつけられ、彩花としてはあまり面白くない。が、そんなひがみ根性を丸出しにするわけにもいかず、口に出して不満を伝えたことはない。

「何してるの？」

「見物ですよ。西條さんに女の客が来たって。社内の女達、ほとんど降りてきてるんじゃないかな」

言われてみれば、電子ゲートの内部に入れるのはパス持ちか社内の人間だけだ。

「業務ストップしてるんじゃない？」

「仕事よりゴシップが面白いですもん」

ネコのような瞳を輝かせて言ったが、そこには嫉妬や羨望の気配はなかった。

「ジュリアはあの、西條が好きじゃないのね」

「かっこいいと思うけどタイプじゃないなあ」
すごい。いい子だ。

彩花は思わずその頭を撫でていた。

ジュリアは嬉しそうに笑う。

「えーなんですかー？」

「なんでもないけど」

いつ西條と付き合っているのがバレるか。バレたら全社の女性ス
タッフが敵になり、集中砲火を浴びせられる恐怖――。ジュリアだ
けはその中に加わらないかと思うと、張り詰めていたものが緩むよ
うな気がした。

人垣の隙間から窺うと、テーブルに付いて西條と向き合っている
のは若く華やかな、なかなかの美人だった。

「阿木由真ですよ。秋元商事のご令嬢」

話題の押しかけ婚約者志願か。

顔を見るのは初めてだった。血統書つきの仔ネコちゃん、という雰囲気だ。大切に育てられ、世の中の悪い所など何も知らない。彩花はその天真爛漫な表情に、満開の桜を連想した。日本人ならば誰もが愛さずにいられないたおやかな華やかさ。

西條は怒るだろうけど、お似合いだ。

「どうしてジュリアは知ってるの。友達？」

「全然。阿木由真のパパがこの社長と知り合いで、あたしのパパも社長の友達だから」

「？」

ジュリアのお父さん、農業してるって言わなかった」

「そうですよ。ブラジルで農業してます。日系だから、娘に母国を見せたいって、ここの社長に頼んで就職したんです。パパ、日本と日本人が大好きで。だからママも日本人。」

あ、コネ入社、怒りますか」

「いやそれはどうでもいい——っていうか、なにかニュアンス違うじゃない？」

社長とお父さんは、何、趣味友とか？」

「うちの農園で作っている物を取引してます」

ジュリアの言い方は青空市場的だったが、当然会社では小口取引は扱っていない。

「——つまり、ジュリアのお父さんは大規模農園を経営してるのね」

「そんな大きくないです。東京ドーム二十個くらいだから」

「……………」

世界で自分だけが庶民な気がしてきた彩花だった。落ち込んでいてもしかたない、が……世の中って。

「お嬢様同士で友達になったりしないの？」

「パパは日本人の女の子と仲良くしなさいって言ってるけど、あの人はヤマトナデシコじゃないからダメです。ほら、西條さんが面白くなさそう」

確かに西條はいつになく機嫌が悪そうだ。場所が会社ではあるし、相手は取引先のお嬢様だから自制しているのだという空気を漂わせている。西條は大人で社会人としての仮面も常備しているから、あれは相当業を煮やしているのだろう。

阿木由真は第一印象と違って結構いい根性なのだろうか。自分だったら西條のあの氷柱のような鋭い視線を受けて笑顔でなんていられない。

「あれ、先輩上がっちゃう？」

「仕事に戻らないと。今日も忙しいから」

「あたしも戻ろっかな」

西條にその気はないけど、やっぱり断るのは難しいだろう。彩花はエレベーターの中で密封された空気の重苦しさを初めて味わった。

西條が部長に呼ばれたのでいやな予感はしたのだ。

「出向？」

それって懲戒人事ってこと？」

「一週間ですけどね。頭冷やせて言われました」

阿木由真にそっけない態度をとったのが上層部の怒りを買ったらしい。

「部長はなんて？」

「一週間遊んでこいって。そのうち彼女の熱も冷めますよ。上の方もそう本気じゃなくて、あっちの顔を立てるためってだけですから」

「でも悔しいよ。大事な仕事抱えてる西條をそんな右から左に」

「損害をかぶるのは会社ですから」

冷ややかに述べた西條は至って冷静だ。

「一週間遊んできます。」

寂しい？」

優しい目で覗き込まれて、彩花は思わずその胸に額を押し付けていた。

「決まってるじゃない」

「ごめん……」

「なにがっ」

「馬鹿なこと訊ねて、と——寂しがってる先輩って可愛いなって思っちゃって、ごめん」

抱きしめられると全身が西條の体温につつまれる。暖かくて硬い西條の身体。大丈夫、西條はちゃんとここにいる。

西條が一週間の出張に出たその夜、春臣からメールが来た。

『メシ食うぞ』

誘いではなく命令か。

いい態度だ。

彩花はぐっとケータイを握りしめた。

二人の仲が好転すれば状況も打開できるはずだ。西條がいないこの一週間を活用して絶対仲直りさせてみせる。

三ツ星高級フレンチにでも連れていかれるのかと身構えていたら、意外にも懐石料理のお店だった。

カウンターもある小さな店だが、清潔感が溢れていて店員の態度も清々しいくらい明るい。まだ早い時間なのに席はほとんど埋まっていた。

春臣は彩花を座らせてから自分もその隣に腰を下ろした。カウンターを挟む形の厨房で二人の板さん達に指示を出していた人に会釈する。

四十代くらいの、たたき上げの俳優のような、苦味ばしったいい男だ。

「青梅さん。これ、彩花っていうの」

これだと？

レイファーストが自然に身についているわりに言葉が悪いな。

「青梅さんはここの板長。ここのはマジうまいぜ。海外の客連れてくると食いながら泣くし」

「いつもご贔屓にしていただいて」

板長さん、声も渋い。ズーんと腰骨に来る重低音だ。着物姿で大小の刀を腰に差していたほうが外国人にはうけそう。

「仕事の仕事だから、新しく知り合う六割以上が日本人じゃねえの。絶対訊かれるのが、日本に行くけど、どのお店がおいしいの？って一応、ちゃんとした店知ってないと恥だろ。青梅さんの店がなかったら、マジやばい」

板長は痩せた顔に微かな笑みを浮かべた。

客と常連の関係を上回るものを二人の間に感じた。なにより、春

臣が他人を顧みるなんて驚きだ。多分春臣はこの板長が好きで、店が好きで、せっせと知人を紹介しているのだろう。他人なんてどうでもいい、辛辣さはなりを潜めている。

「んで、この女。日本人のくせにまともな和食ってもんを食ったことないから。目、覚まさせてやって」

「口が過ぎるぞ。」

何かお好みはありますか」

春臣を鋭く注意したけど、その表情は優しい。春臣も平気のようだ。

彩花は戸惑った。

どうして――。西條とはこんな風に仲良くできないのだろうか。双子なのに。それとも、西條がそうさせない？

「彩花さん？」

「え、あ……そうですねっ。春臣の言うとおり、よくわからないからお勧めをお願いします」

「では苦手なものは」

「何でも食べます」

料理はすばらしかった。

関西風の味付けで、色も薄くて、一見水煮？と思うようなものも、見た目とは全然違っておダシの良い味が浸み込んでいた。

「おいしい……っ」

「だろ？」

うまいもん食わないと料理の腕あがないぞ」

「あんまり好きじゃないからなあ」

そのせいか、味もいまいち。

「一人のときは作るけど。外食もったいないし」

「コウといるときは」

「西條が作ってくれる」

最初に西條が作って、次は彩花が作った。三回目以降、何の話し合いもなく西條がエプロンをつけるようになった。

西條の方が上手に作るし、キッチンに立つ男というのはとても色っぽい。

「代わりに掃除とか洗濯とかやってる。週末だけだしね——ダメだと思う？」

気にはなっていた。

基本お泊りは週末だけで、最近は西條の部屋で過ごしている。物ががない西條の部屋はいつも片付いていて、汚れ物が溜まっていることもない。結局彩花はごろごろしてることが多いのだけど。

「甘やかしてんな」

「だよね。何かしたいとは言うんだけど、やらしてくれなくて」

「いいんじゃないの。」

あんたも働いてるわけだし、それに——」

春臣はぐつと身体を倒して彩花に近づき、その耳元で囁いた。

「他のことで十分満足させてやってんだろ」

「っ……」

彩花はぱつと身をひいたが、その顔はみるみるうちに真っ赤になった。

春臣は笑いだした。

「そうじゃなきゃ、男はそこまで尽さないって」

別の客の対応をしていた青梅が、戻ってきて二人の前に次の皿を置いた。訝しげに彩花を見つめて、

「酒が強すぎましたか。水を差し上げましょうか」

先に出ていた料理には日本酒が使われていた。彩花はますます赤くなる頬やら額やらに手を当て、早く冷めろと焦りまくった。

「……っいえ、もう、おいしいです。料理のせいじゃなくて、えー……っ、ちよつと暑いかなって」

「酔ったんじゃないの？」

大きな手が火照った項に当てられた。冷たい指が耳の下に触れる。

「酒、弱いんだ。可愛いな」

「か……からかうなっ」

双子だから体質も似ている？

西條も体温が低い。同じような体温と感触に、ぴくんと身体が反応してしまう。

指は首筋をゆっくりと辿ると離れていった。

「青梅さん、何か冷たいデザート出してやって。オレは食後酒」
店を出ると春臣は意外にも送ると言い出した。

ワイン＋トニックウォーター 19

他の飲み屋にひっぱり回されるものだと思っていたし、家に送るなんて面倒だと言いそうなタイプだと。口説くつもりの女は別として。

「ごめん」

「ん？」

「色々誤解してたみたい——先入観のせいかな。意外に思うことが多かったから」

「それはオレが感じ悪い奴だったからだろ」

春臣は笑い出すと、彩花の頭をくしゃくしゃにした。

「やめてっ」

「あんたって面白い。子供みたい」

「それは春臣の方でしょう。これから電車乗らなきゃいけないのに鏡がないと完全には直せない。しかたなく、彩花は髪をまとめていたコンコルドを外した。

手櫛で撫で付けていると、春臣が手を伸ばしてきた。

「下ろしてた方がいいな、やっぱり。なんで？」

長い指が髪をかき上げ背中に流していく。

「邪魔だから」

正面に立つ春臣の腕の中に囲い込まれて、彩花は居心地が悪いよな、妙に馴染んでいるような、相反する感情の板場さみになっていた。春臣がこうまで西條に似ていなければ。

違和感がない自分に『大丈夫っ？』と思ってしまう。

「送ってくれなくていいよ。電車まだあるから」

「送る。」

あなたのアパートの回り、夜遅くなると真っ暗になるだろ」

「平気。駅で大抵知り合いと一緒にになるから」

「……………で、一緒になると？」

「方向が同じだったら送ってくれる」

中には逆方向でも送ってくれる親切な人もいるが。

「下町だから、皆優しいんだよ」

「あんたはバカだな」

優しく髪を梳いていた指が、いきなり頬を抓ってひっぱった。

「ひいひゃいっ」

「コウもよく野放しにしておくよな」

「痛いってばっ」

ようやく& a mp; #25445;ぎ離れたときには両方の頬はぶっくり膨らんで赤くなっていた。

「なにするのっ」

「騒ぐな。うるさい」

「おたふく風邪だって誤解されて電車に乗せてもらえない」

「こんな時間の酒臭い電車なんか乗れるか。タクシー呼ぶ」

「だめっ」

「リムジンじゃないと、か？」

「そっちこそバカ？」

ここからうちまでタクシーなんて幾らかかると――」

貧血起こしそう。彩花は額を押さえた。

「一ヶ月の生活費越えちゃう」

本当に眩暈がしてきた。

春臣も真顔になった。彩花とは意味が違ったが。

「……あんた、道端の雑草でも食って生きてんの？」

「うるさいな。ちゃんと店で買ってます」

時間と材料費がかからない料理が好きなだけだ。自分で準備する場合のみ。だから微妙な味になってしまうのかもしれない、が。

彩花の制止も構わず、春臣はタクシーを呼んでしまった。

座席に押し込まれては観念するしかない。

「まさかこの料金を請求するつもりとか、あ、さっきの食事も?」
止めて。今月の貯金が……!」

安月給のOLには死活問題なのに。

「請求しない。対価も要求しない。頼むからこれ以上恥かせんな」
運転手さんがこっそり肩を震わせていた。

街の夜は明るい。信号機や街灯やネオンにチラチラと照らされる春臣の横顔には色香という凄みがあった。

正直二人を見間違う人間がいるなんて信じられない。顔立ちこそ同じだけど、二人は氣質が違いすぎる。西條は社交的で人当たりも良いけれど、実は多くを明かさない。水面下に暗く巨大な影を隠す氷山を連想させる。一方春臣は強烈な個性を惜しげもなく露出していた。

「仕事、楽しい？」

「まあまあ」

「なんでパイロットに」

「本当は戦闘機に乗りたかった」

「冗談——」

「自衛隊に入ろうかと思ったら、広報が色めき立っちゃってさ。客寄せパンダに予算注ぎ込んだ戦闘機操縦させるわけないだろ。

しかたないから旅客機にした。

フライトアテンダントや客や株主の奥様方のパンダではあるけど、操縦席には座れる」

奇跡のような外見が齎した弊害？

彩花は皮肉な形に唇を歪めた。

「それ、手、なの？」

全然文句なさそうなんですけど。モテまくって楽しんでるでしょう？」

「——当たり前だろ、男なんだから」

彩花の態度が変わらないと察したのか、春臣は悲しげだった愁眉をすくると解いて悪党面を取り戻した。

「なんだ、いつもはうまくいくのに」

「せめて誠実に付き合いなさいよ。どうせ同時に複数掛け持ちだろ

うけど」

「皆『不誠実な男』に惚れるわけだから、そのイメージ損ねちゃダメだろ」

彩花はある疑問を、恐らく経験者であるはずの春臣に投げかけた。気分を害することを恐れずに済む相手というのは何かと便利だ。

「日本人の男って海外でモテるって本当？」

「男に？」

春臣は背筋がぞくりとくる色っぽい目つきを流してきた。

「本当。肌がきれいで、自己主張しすぎない神秘性もいい、とか言われて。あっちの連中からすれば日本人の外見年齢不詳さなんて殆どホラーの域だしな。」

今『日本』がブームだから女も引く手数多。日本の女の子大好きなセレブ紹介してやろうか。結婚したらモナコやニースの豪邸で暮らせる」

「遠慮します。」

で、春臣もそういうセレブなお嬢様や未亡人といつでも結婚できるから実家を継ぐ必要なんてない？」

答えが返ってこないのだから春臣の方に顔を向けた彩花は、そこに驚くほど投げやりな自己嫌悪を見つけた。

伏せた長い睫の下で光を失った瞳が潤んでいるようだった。

彩花は自己嫌悪に唇を噛み締めた。

「……ごめん……」

「べつに。あんたは間違っちゃないし」

唇が苦い笑みを含む。

「今までと同じで、これからも適当やってくわけだから。

継ぐ必要がないから——じゃなくて、継ぎたくない。多分コウほど強くないだけで。

……信じられないか」

出会いからこれまで春臣を信用する理由など一つもない。でも彩花は頷けなかった。

春臣はその迷いに食い込んだ。手を取り指を絡ませて強く握り締める。

「信じろよ。オレを信じろ」

剥き出しの肌に熱湯を浴びせかけられたかのように、その言葉は激しく彩花を揺さぶった。

春臣は実家を継ぐことになっても本当は構わないのだと思っていた。下らない取引を持ちかけるくらいだから。でも——嘘ではない。春臣は彩花を騙そうとはしていない。

西條が頑なに拒む実家を、春臣も同じように嫌っているのなら。

「……………」

春臣が本当に犠牲を払うのなら、対価を提供しなければならない。

春臣が望むものを。

双子は感覚も似るのか、春臣の部屋も殺風景だった。高給取りらしくマンション自体はゴージャスだったけれど、家具らしいものがほとんどない。

空っぽの部屋。

出迎えた春臣はまだ制服姿だった。

ネクタイを引き抜き、シャツの襟元をくつろげる。僅かな疲労感を漂わせながら彩花を案内した。

「手前のドアが使ってない部屋。そこがクローゼット、奥がトイレ、その横が風呂、ここがキッチン、リビング、寝室。OK？」

「なにが？」

いきなり間取りの説明とは。

「この部屋売りに出す練習？」

「面白いよなあんた。」

じゃあオレ寝るから。メシと掃除よろしく」

「は？」

「メシは適当に、ああコウが好きな奴でいいや。味覚似てるし」

あー疲れたと、春臣は寝室に消えた。

彩花は安堵のあまり脱力してしゃがみこんだ。

そうだよ、いくら変人でも兄弟と付き合っている相手に手は出さないよね。

イヤミと嫌がらせとお手伝い扱いになら耐えられる。

命令通り、夕食を作り掃除を終えても春臣は起きてこなかった。洗濯もしてしまう。ドラム式の乾燥までできるタイプだったので、仕上げるにワイシャツなどにアイロンを掛ければ終了。――まだ起きない。

九時を過ぎたので帰ろうと決めた。

正直、拍子抜けした。

ワイン＋トニックウォーター 23

翌日の夕方、またメールが来た。勝手に帰ったことへの文句はなかったからあれでよかったらしい。

玄関のドアを開けた春臣は私服だった。

「来ないのかと思った」

「買い物してきた」

時計を確認すると、昨日より少し遅くなったただけだ。

「今偶然忙しくないけど、残業も続くときは続くから。それでも時間通りに来いって言うつもり？」

「そんなにハードなのか」

「まあそれなりに」

「それで生活が苦しい？」

こいつ、絶対女子事務系の相場をわかつちやいない。

「長時間拘束されて給料安いってやってられねえ」

「それはわたしも思うけど。」

雇用機会も給与も全然平等じゃないし、同じ内容の仕事——っていかそれ以上をこなしても、月給は仕事しない方が上、なんて現場ではよくある話だから。

特にわたしの職場なんて特殊スキルが認められるわけじゃないから転職の有利さもない。女性でも年収一千万なんて特集見たりすると、焦るには焦るよね。もういい歳だし。

でも給料や役職が上がらないのはそれが会社だったり社会の仕組みだったりするわけで、目に見える形で評価してもらえなくても、ちゃんとやってるかやってないかは自分が一番わかるじゃない？

自分に恥ずかしくない仕事をするのは、誰のためでもなく自分のためだと思う。

一応、食べるに困らないだけは稼げるし。お金持ちにはなれないけどね」

春臣はあきれ果てたという顔をした。

仕方ない。自分でも不甲斐ないと思うくらいだから。

「あんたそれ、そうとう都合いい奴になってる」

「そう？」

「でもかっこいいな」

「は？」

意外な反応に彩花は首を傾げた。

春臣は笑ってその頭を掴むとてっぺんにキスをした。

「すげえかっこいい。男前」

「ちよっ——やめ、は？」

男前ってなにそれ、ばかにしてるの」

「女らしいとは違うしな。褒めてる、褒めてる。

ここに来るのにムリはしなくていいから」

やけにあっさりと。

ワイン＋トニックウォーター 24

彩花が疑わしそうな顔を見ると、春臣は肩を竦めた。

「あんた仕事に穴開けないよう無茶して倒れそう。」

洗濯どーも。あんたアイロンうまいな。メシは微妙だったけど」
春臣はクスクスと笑った。

「ホント、微妙」

「自分でもそう思う。西條の方がうまいもの。段取りいいし」

「あいつ料理歴長いからな」

お母さんは早くに亡くなったらしい。

「西條が料理担当？」

「オレもつくるよ。家事は通いの人がやってくれたから別にする必要なかったけど」

さすがお金持ち。

「慣れた味を食いたかったら、説明するより自分で作った方が早い」
春臣は彩花が持っていた買い物袋を受け取って中身を覗き込んだ。
「オレがメシ作るから、あんたはそれ以外適当にやってな」

そう言われても、片付いたままの部屋は掃除するところもない。

彩花はカウンターに座って料理をする春臣を見ていた。

「酒は？」

「何が好き」

「あまり強くないから。薄いジントニックとか、ソルティードッグとか」

「さっぱり系か——なるほど」

数回頷くと、スマートな手つきでライムを効かせたジントニックを作ってくれた。自分用には赤ワインをトニックウォーターで割った物を。ロゼ色のグラス片手にフライパンを持つ男はなかなか見たえがある。

「何かのCMみたい」

彩花は感心して呟いた。

「システムキッチンのとか？」

「日本人なら謙遜するところだよ。

ワインってあんまり飲まないんだけど、薄くなってもおいしいもの？」

「食事中や食前酒としてはこっちのほうがいい。二十度近いワインを飲み続けてたら舌がまいっちゃまって、料理の味なんかわからなくなる。」

料理に合わせてワインをぐいぐいけるのなんて、勤務中の昼メシにボトル半開ける国の連中だけだと思うぜ」

「弱い方？」

「弱くはない。けど、飲酒程度の愉しみで身体壊す必要はないだろ。食事の最中は薄いワイン、食後に少量の上等なブランデー。これなら二日酔いとも無縁でいられる」

春臣の言葉には実地経験からくる重みがあった。国際線パイロットの春臣が日々接するのは、生活習慣の違う異国の人々だ。自信たっぷりの春臣のことだから、どんな環境でも弱味を見せずに飄々と渡り合っているに違いない。スマートにかっこよく生きるのは並大抵のプライドでは勤まらないのだと彩花は気がついた。

「飲んでみれば」

ワインの渋さがまろやかになり、炭酸が爽やかさをプラスしている。おいしかった。

ピリピリとした刺激の中から舌が探し出す濃い果物の味。

捉えどころがなくて、おだやかで、なんとなく切ない。

アルコールだけど、酔う気がなくて、中途半端に突き放したような。

細かい泡がゆらゆらと昇っているグラスを返した時、指が春臣の手に触れた。

春臣の料理の腕は言うだけあってさすがに上手く、西條の味とよく似ていた。

「つまりこれがお母さんの味なんだね」

なんとなく、しみじみしてしまう。

「っていうか、あんたもよく図々しくメシ食うな」

「いいでしょう。二人分あるんだから」

これから帰って作って食べてはすぐ寝る時間で太ってしまうではないか。

「明日は」

「仕事」

「どこ行くの」

「オーストリア」

オーストリアといえば——音楽とチョコレート。彩花は後者を想って瞳を輝かせた。

「いいな——」

「メシ食いながらよだれ出してんな。」

わかったよ。買ってきてやる。けど覚悟しとけよ。あっちの菓子の甘さはハンパねえ。文句は言わせないからな、残すなよ」

「大丈夫、大丈夫」

いざとなったら給湯室に置いておやつに回そう。日本に支店を展開していない店だったりすれば好評価は間違いない。

「いつ帰ってくるの」

「今回は四日後かな」

「四日後？」

西條の出張が終わる日だ。

「何かあるのか」

「別に——また出張家事サービスに来なきゃいけないのかなって」

出社は翌日からだから四日後ならギリギリ。でもその後はどうしよう。黙って春臣に会っているのを隠し通せるだろうか。

「来いよ。土産渡せないだろ。これ鍵」

「スペアキーなんて貰えない。怖いし、春臣の恋人と鉢合わせしたら困るし」

「そんなのいない。今このスペア持ってんの、あんただけだから」
つまりあれか。

この男、恋人は派遣家政婦みたいに使ったりしないと言いたいのか。

「すき焼きの材料買つというて」

「すき焼き？」

「一人だと鍋食うことないしな。」

肉はいいやつにしろよ。せっかく日本の肉はうまいんだから」

「そう？」

「あんた日本以外で食ってみろよ。あれは概念、というか規格が違う別の食い物だ」

肉なんて滅多に食べないから果たして違いがわかるだろうか。馬鹿にされそうだから口には出さなかった。

春臣が鍵の隣に封筒を置いた。

「金はこれ使って。今までかかったのはここからひいて」

封筒はかなりの厚みがあった。

彩花は念のために中身を確かめた。全部一万円札で五十枚。持つ手が震えるよ。

「これで何を買えとっ？」

「何って食費と、あんたがこの部屋で過ごすのに足りない物。適当に。足りなくなったら足すから」

食費と雑費で五十万円……。

さすがおぼっちゃま育ちの高給取り。

彩花は絶句して封筒を見下ろした。

海老名の奴。

打ち合わせの予定をすっぱかしてくれたお陰で、お詫びと証した接待を急遽用意しなければならなくなった。こちらは課長も部長も出席するという大事になってしまったし、こんな急では良い店を押さえるのも難しい。

接待が日常業務の営業部に頼みこみ、懇意の店を紹介してもらってなんとか用意を整えた。

「海老名のあほか……っ」

彩花は自分の仕事をこなしつつ、後始末に手を尽した。一日中席を立てない忙しさの中、ジュリアが隣の席から話しかけてきた。既に定時は過ぎ、オフィスの人影は半分ほどに減っていた。

「西條さんが双子って本当ですか」

彩花は閉じようとしていた引き出しに指を挟んだ。

「ったー……っ、って、何、いきなりっ？」

「西條さんのそっくりさんを見たって噂で」

「どこでっ」

「？」

下のロビー」

「あ——ああ、それなら会った。わたしも会ったよっ」

動揺するな、落ち着けわたしっ。

「西條を訪ねて来てたね。双子のお兄さん」

「見分けつかないくらいそっくり？」

「似てはいるけど見分けはつくよ。」

ジュリアはなに、今日は残業？」

「ううん。帰りますけど。」

先輩、西條兄にいじめられてるんですか」

彩花は絶句した。

ジュリアは神か？

「ど………どういう意味」

「わかんない。けど先輩このごろ元気ないし」

「それと西條兄がどう繋がるのかな、って」

「野生のカン——じゃなくて女のカン。」

あー、おなかすいちゃった。帰ろうっと。先輩はまだ？」

「……ま、だ。全然まだ」

「じゃあこれあげます。おいしいよ。」

西條さんね、部長に言ったんですって。噂ですけど。ちゃんとお付き合ひして結婚も考えている相手がいるから阿木由真は断るって。誰なんでしょうね。

お疲れ様でした」

彩花の手の平に置かれたチョコレートのお菓子がオーストリア製だったら悪魔祓いと呼ぶところだ。恐る恐るそれをひっくり返す彩花だった。

準備を整え、打ち首覚悟の海老名と、上司三名を高級料亭目指して送り出す。

「こんなときに西條がいてくれたら――」

「出張命じたの部長ですよ」

「う……」

「どうぞ頑張ってきてください。ご武運を祈ってますよ」

無人になった企画部で、彩花が捗らなかった自分の仕事を片付けているうちに八時近くになってしまった。

遅くなってしまった。

急ぎ足でオフィスを出てロッカールームに向かう途中で、彩花はいるはずがない姿に驚愕し立ち尽くした。

「西條――お帰り」

「ただいま。遅くまでお疲れ様です」

「それは西條こそっていうか、どうしたの？」

今日は出張先から直帰のはずだ。

「部長からヘルプ要請がきて。顔を出せるようなら来いと。ただ行き先がわからなかったものですから」

部長相当テンパってるな。大丈夫だろうか接待は。

彩花は店の住所と連絡先を西條のケータイにメールで送った。

「海老名ですって？」

「うん。今度のポカはちよつとね」

「今夜あいてますか。」

もう遅いけど。おれは当事者じゃないし、顔だけだしたら解放されると思うので」

「ごめん。ちょっと用事が――」

目が泳いだ。しまったと思ったときにはもう遅い。

「――」

「あ……………」

頭の上に降ってくる沈黙が重かった。

「……………あのね、」

「——そうですか」

賑やかな話し声が近づいてくる。他の課に残っていたスタッフ達だろう。パニックに陥った頭はうまい言葉など排出してくれない。

彩花は何も言わずに足早にその場を後にした。西條を残して。

ワイン＋トニックウォーター 28 (前書き)

お待たせしました。応援くださった皆さんのおかげで復活できました。最後までよろしくお願いします。

春臣の事を話そうか。

話すべきだとは思う。春臣にも口止めはされていない。

春臣としては仲たがいは望むところだろうから、そりゃ口止めなんてしないさ。彩花は天を仰いだ。夜空は真っ暗で、そりゃそうだけど、星もなくて、東京だからね。

ポタリと雨が。

「余計ヘコむわーっ」

なんで東京になんか住んでいるんだろう。

何もかもがイヤになる。

彩花は強く首を振って、水滴と後ろ向きな気持ちを振り払った。

「春臣、もう帰ってるかな――」

彩花に鍵を渡したのは春臣の方が遅くなりそうだったからで。その計算では恐らく彩花の退社時間は定時の六時のはず。

会社を出るときにケータイをチェックしたら春臣からのメールが入っていた。

遅くなる旨を返信して、春臣のマンションへ向かう途中にある高級品取り扱いスーパーに立ち寄った。本当は商店街の専門店がよかったけど、この時間だと終わっている。野菜などを購入し、メインの肉へ。

「グラム二千五百……えんっ？」

すき焼き用お勧めコースだそうです。

多めに二人分を切ってもらって、一万五千円。他人の財布でなければ買えない肉だ。

恭しいほど愛想よく対応してくれた店員の見送りを背に、彩花は食材をまとめた紙袋を壊れ物でも扱うみたいに持って店を出た。

スーパーを出ると雨がひどくなっていた。

昼過ぎから振り出した雨は夜には雨足を強め、街をすっかりびしょ濡れにした。

臣のマンションまでは一駅分の距離。
歩くか。

ここでタクシーの存在を思いつかない彩花はやっぱり極貧生活が身についている。

夜といってもまだ人気は多いし、家の明かりもついている。治安の悪い街ではないし、雨さえ降っていなければ快適な散歩だろう。

雨さえ降っていなければ。

雨は視野を悪くする。

突進してきた車に、彩花は悲鳴をあげて道の端によった。壁に張り付くようにして避けた彩花を、車の方も急ハンドルで避けたはいが。

そこには大きな水溜りがあった。

人生初体験、悲しいが恐らくはコレが初めて最後になるだろう高級肉を、彩花が身を挺して庇ったのは本能のなせるわざだった。

「遅い……っていうか、なんて格好だよ」

春臣の部屋にたどり着いた彩花は全身から水を滴らせていた。

不機嫌そうなのにわざわざ玄関まで出向いてドアを開けた春臣は、その姿に長い睫を瞬かせた。

「車に掛けられた。でも、ほら、これは無事」

彩花が自慢げに両手で突き出した買い物袋を、春臣は投げるように床に置いた。

「ちょっと……っ」

命がけで守ったんですけど？

「怪我はっ」

「ない」

「とにかく風呂に行け。シャワー浴びろよ。服はクリーニングサービスに」

「洗濯機と乾燥機かして。丸洗いできる服だから」

高速処理すれば帰るまでには乾いている。春臣が防音機能の高いマンションに住み、いい洗濯乾燥機を持っていて助かった。さすがに泥水を浴びたままでは気持ち悪いし、服がないからここに泊まるという選択肢も選びにくい。

春臣のバスルームは広いけどシンプル。色は黒と白。観葉植物はなし。

洗濯機に着ている物を上から下まで放り込み乾燥までの最短コースを選ぶ。上着は洗濯機洗い禁止のマークが入っていたけれど、一回くらい平気だろう。

シャワーの下に入り頭から思い切り湯を浴びてやっと気分がよくなった。

「そうだ、靴——」

乾かしておかなければ。

物音に、彩花は何気なく振り向いた。

振り向いてはいけなかったのに。

二人しかいない屋根の下で、自分以外に扉を開けるのは誰か。考えればわかったはずなのに。

「……春臣……っ」

彩花は水滴を飛び散らせながら正面に向き直った。

「出ていってっ」

びっくりした。熱いシャワーのせいだけではなく、頭にかーっと血が昇る。三十路間際の裸なんて、恋人以外には見せたくない。これがせめて二十歳そこその頃なら――。何年遡ろうがナイスボディーに近づくわけではないが。

違う、そうじゃない。

「何なの、使い方ならわかるからっ」

「確かめようと思って」

「ケガのこと？」

怪我なんてしてないから。無事っ」

「本当に？」

「春臣……っ」

どうして出ていってくれない？

「ウソついてどうするのよ。無事。だいたい車に当たってないから」

「確かめないと安心できない」

濡れた床を近づいてくる足音に、彩花は激しく首を振った。

「来ないでっ」

足音は止まったが、彩花は自分の裸の身体を強烈に意識した。滝のように落ちてくる湯の中で、たまらず俯く。

全裸の、無防備な背中が春臣の目の前に晒されている。

せめてバストイレが一緒になったタイプならよかったのに。それならシャワーカーテンの陰に逃げ込める。でも今彩花を隠してくれ

そうなのは柔らかな湯と霧のような湯気だけ。彩花は両手でわが身を抱きしめた。お湯を浴びているのに震えが止まらない。

羞恥に上気し桜色に染まる肌を水滴が零れ落ちていく。

続く沈黙が永遠にも感じられた。

肩に触れたものが春臣の手だと知り、彩花は悲鳴じみた抗議の声をあげた。

春臣の指は一瞬の躊躇を見せたが、激しく震えている身体に回された。

「春臣……っ」

「きれいだな」

「やめて。裸を見てその気になるような子供じゃないでしょう」

無理やり冗談めかした笑い声は無様に喉の奥に張り付いた。

背中に感じるのは春臣の身体だ。

ほっそりとしているながら、鍛えられた筋肉が荒削りの彫刻のような。強靱な力を秘めた獣が息づいている。

「やりたい盛りでなくても、十分その気にさせるだけはある」

「褒めてもらえて嬉しいけど。出て行って、今すぐ」

「覚悟しとけて言っただろう？」

それともコウと寝てないのか」

『同じように付き合う』

確かにそれが条件だったけど。春臣が今日まで要求したのは面倒だけど害のない物ばかりで。

覚悟なんて全然できてない。

「そ——そうだよ。西條とは清いお付き合いで、キスひとつしてない」

「じゃあここについてるキスマーク、他の男につけさせたんだ」

肩甲骨の下を爪がかすめ、彩花はびくっと首を竦めた。

耳元に春臣の唇が近づき低く囁いた。

「そいつはあんたのいい所を熟知してるみたいだぜ」

「……できない……」

春臣は肩に乗せていた腕を前に回して彩花を抱きしめた。

「ご覧のとおり、オレ達はそっくりだ。コウとしていると思えよ」
後ろ首に唇が押し付けられた。ゆっくりと動きながら、狭間から覗いた舌が肌を撫でる。骨に歯が触れて紛れもない悦楽が呼び覚まされていく。

西條と別れることになっても。

いつか必ず別れる日がくるからこそ。

何かしてあげたかった。

西條のために――いや自分のためだ。

何の取り柄もないけど、たった一回だけでも役に立てたらその記憶の片隅に残るかもしれない。打算的でイヤになる。

「……………」

「泣くなよ」

「……な、ないてない。やるならやれば」

「コウが最初の男ってわけじゃないだろ？」

楽しませてやるから。今だけあいつを忘れる。コウだってちよつと顔がいいだけの、どこにでもいる男だ」

春臣の言葉に滲む自虐的な嫌悪感に気づく余裕はなかった。好きにしろと言いながら、イヤでイヤでたまらなかった。西條ではない誰かに抱かれるなんて吐き気がする。死んでしまいたいそうだ。彩花は唇を噛み締めて嗚咽を堪えた。

「――なんて思える奴相手の為にここまでしないか。

悪かった。わかったから――ほら泣くなって」

大きな手が目元を覆った。彩花は驚いて肩越しに春臣を仰ぎ見た。春臣はしばらく彩花を見つめ、やがて赤く腫れた眦に唇を押し付けた。

「服が乾くまでベッドに入ってな。

服は貸さないからな。今オレの服なんて着られたらさすがに理性が限界」

問答無用でベッドに追いやられてしまった。

危機は脱した？

精神的疲労はピークに達して、そのまま眠り込んでしまいたいそうだ

った。

大変な一日ではあったし。

……話し声で目が覚めた。

「——って、寝ちゃったよっ」

彩花は跳ね起きながら心の中で激しく己を叱り飛ばした。この愚か者めが。

「いいからそこをどけ」

……西條の声？

まさかそんな、……この世にいるのは神様じゃなくて悪魔か？

「よくここがわかったな。コウが来てくれるの初めてだし、歓迎してやってもいい。けど、もう遅いんだよ。出てけ」

「ハルが常識を語る日がくるなんてね。

誰かいるわけ？」

「お前には関係ない」

足音と話し声はだんだん近づいてくる。

彩花は視線をさ迷わせた。隠れないと——。

だが家具のない部屋には逃げ込む場所もなかった。クローゼットの扉は寝室には通じていない。ベッドの下なら——十センチ程度の間しかなかった。

「寝室はどこ？」

ここですっ。

いっそのことベランダに出てしまおうか。東京の夜空に素っ裸を晒すのも悪くない——悪いよっ。

思い余った彩花のアイディアにも弱点があった。寝室にベランダはなかった。

「マジ、いい加減にしろよ。素行調査かよ。帰れ」

「そこか。どけ」

音をたてて開いたドアから光が雪崩れ込んできた。

光の中に浮かび上がる二人の男の影に、彩花は凍りついたように動きを止めた。

沈黙が世界を支配する。

西條の視線が動くのを感じた。

薄暗い部屋に白く浮かぶシートと、シートより白い裸の肌。

畳んで椅子の背に掛けられた服に気づいた顔が一瞬泣き出しそうに歪んだ。

もし彩花の服が床に散らばっていたら。いやボタンの一つでも取れていたら。西條は春臣を殴っていたかもしれない。でも服は合意の上であることを語るように整然と置かれていた。

彩花は誤解だと叫びたかった。

でも、黙って目を逸らした。

ここまできたらやるしかない。

西條が誤解して、春臣がそれに満足するなら。

別れることになっても――別れるに決まっているけど。それで西條が自由になれるなら。

膠着状態から最初に脱したのは西條だった。

「――ごめん」

謝罪を一言だけ残し立ち去っていく背中が、自分こそ闖入者だと悟った事と語っていた。

玄関のドアが閉まる微かな音がやけに大きく聞こえた。

「……………っ……………」

彩花は握り締めたシートに突っ伏して泣き声を押し殺した。
泣くな。泣いちゃだめだ。

自分で決めて進んだ道なんだから。

ベッドが軋んで僅かに沈んだ。

彩花はのろのろと顔をあげた。

ベッドに腰を下ろした春臣は、どこかぼんやりとした眼差しを壁
に向けて呟いた。

「コウがここに来るよう仕組んだの——オレ」

「……………え？」

一瞬、意味がわからずに彩花は眉を寄せた。

「それ寝言？」

そうじゃないなら殴るけど」

ワイン＋トニックウォーター 32

「……つまり、さっきの演技だったわけ？」

「まあな」

「服も？」

「否定はしない」

「やったんじゃない！」

彩花は呆れ返った。同時に怒りが湧き上がる。

「頭いい人は違うのね。なにその腹黒さ。」

穏便に行こうと思ってたけど、もう止めた。こうなったら平和的
なものもない。

一体どうして西條にちよっかい出すの。わたしには聞く権利があ
る」

濡れた目元を荒々しくこすり、身体を起こしてシーツを撒きつけ
る。

「正直に話さないと殴ってやる」

春臣はため息をつき、小さく笑った。

「高校のとき、コウの彼女とやってるの見られた」

今夜と同じじゃないか。成長ないにもほどがある。彩花は額を押
さえて呻いた。

「あのね——」

「でもそれが誤解だった。」

オレが押し倒されたところにちょうどあいつが帰ってきて。

なんか元々その女の目的はオレの方で、でもその頃からオレが思
いっきり遊んで一人と付き合わなかったから。コウの方が攻略し
やすいと踏んで。

あいつ、何にも言わなかった。

さっきみたいに黙って出ていっただけ」

「それは……」

「次の日から益々態度は冷たくなって弁解もできない。どうせ嫌われるなら、誤解じゃなくて本当にしてやろうかと思った。

あいつが本気の女を盗ればその時こそこっちを見るかもしれない。無視されるより心底憎まれるほうがいい」

彩花は目を見開いた。

「ねえそれって、西條のこと大好きなんじゃない？」

「――兄弟だしな」

春臣が否定しないことに驚きは募る。

世の中を舐めきって、常に斜め目線な春臣に人並みの家族愛があるなんて。西條だって絶対に気づいてない。

「こんなことして嫌われちゃうじゃない」

「どうせ嫌われてる。妙な女の策略に乗って嫌われるくらいなら、自分のせいの方がマシだ」

わかりにくい心理だが、男の考えることなんて案外意味不明なものだ。

「わたし、帰る」

春臣はうろたえたように彩花の手を掴んだ。もう隠さないと決めたのか、素直なほど感情を剥き出した目は捨てられた小犬のようだった。

「もう遅いから泊まってけよ。一人にするな。コウは元から女を信用してなかった。父親が女にだらしなくて、女も簡単に足を開くから。オレもそんな女しか知らない。

でもあんたは違う」

「春臣」

呼ばれてこちらを向いた顔を思いつき張り飛ばした。拳じゃないだけ感謝してもらいたい。

「……………ってえな」

赤くなつた頬骨をさする春臣の表情は、いつもの殺しても死なないふてぶてしさを取り戻しつつあった。

「これで水に流してあげる」

ぎらりと睨んでくる凄みのある美人をベッドから蹴り落とし、手を伸ばして服を取った。

翌日、西條は通常出勤していたが二人で話すチャンスはなかった。出張明けだから仕事は忙しい。

彩花も募る不安を追い出すように仕事に集中した。会社が終わったら捕まえて話をつけてやる。定時を過ぎてふと我に返ると西條の姿は既になかった。

「西條さん？」

ジュリアさんと出ていきましたよ。何か用でした」

「ちょっと訊きたいことがあって」

海老名が親切にもケータイを取り出して、

「メール打ちしましょうか」

「いい。そこまでじゃ——」

「ところで彩花さん、もう帰ります？」

のびのびになってたけど奢らせてください。昨日のお詫びもかねて」

「ごめん。用事あるから」
ジュリアと？」

アーモンド色の肌の、色っぽいラテン系美女と西條のツーショット。違和感なし。似合いすぎる。旅行会社のキャンペーンみたいだ。彩花はロッカールームでケータイを手に、どちらにメールすべきか迷った。西條には避けられる可能性が高い。

『お疲れ様です。いまクラッシュにいます。なにかトラブルですか？』

ジュリアからの返信は迅速だった。

仕事もできて頼りになる後輩だ。もし西條と付き合ったとしても嫌な態度なんて絶対にとらない——よう努力しよう。

クラッシュは会社からそう遠くないショットバーで、間違っても飲み会では使われない。二人きりで盛り上がる時に行く店だ。

重いドアを開くとピアノの静かな演奏が流れていた。黄昏時のような照明、密やかな話し声、グラスの中でぶつかる氷の音。

彩花の無造作な格好は場違いだった。

踏み込めずにドアの近くから店内を見渡すと、奥のテーブル席にいる二人が視界に入った。長身の二人は大人のための店に、詭えたように似合っていた。特にジュリアは就業中の服に手を加えて見事なくらい艶やかに花開いている。溶けそうに情熱的な瞳に見つめられたら落ちない男などいないだろう。

現に男連れにも関らず、男たちの視線はちらちらとジュリアに流れ勝ちだ。

彩花は見向きもされない。

この状況でジュリアから西條を引き離す？

とても勇気がいる行為だ。でもそうしなければ西條と話せない。

彩花は震える手で鞆を握り締め、フロアに一步を踏み出した。

ワイン＋トニックウォーター 33 (後書き)

励ましメールありがとうございます！

優しい方ですね。

すごく、すごく、うれしいです。

先に気づいたのは西條だったが、声を掛けてきたのはジュリアだった。

西條の視線が冷ややかに注がれるのを直視できなくて、彩花は顔を上げられない。

「やだ、やっぱり仕事でトラブルですか？」

「ごめん。この埋め合わせはするから、ちょっとだけ西條を貸してくれない？」

「えーと、あたしも西條さんに話があるんだけど」

「本当にごめんなさい。急用なの」

彩花の顔色のせいだったかもしれない。ジュリアはそれ以上説明も求めず、黙って引いてくれた。

その辺でと彩花は思ったが、西條が自宅へ向かった。

「軽い話ではないでしょう？」

その通りだ。

「でも、よかったですか。噂になりますよ」

ジュリアは違和感を覚えたはずだ。

仕事の話ならジュリアの前でも出来るから。

彩花は二人の関係が社内バレることを恐れ、西條にも口止めを強いていたけれど。

「別に——もうこの部屋に来ることもないだろうから」

別れた後ならどう言い訳もできる。

西條は明りをつけなかった。二人で過ごした部屋を月明かりが冷たく満たしていた。

「昨日はみつともないところを見せてごめんなさい。でも春臣は悪くないの。わたしが勝手に押しかけただけ。

春臣は西條が好きで、兄弟としてちゃんとやり直したがってる。受け入れてあげて」

「――それでおれ達は」

まさかそう尋ねられるとは思ひもしなかった。あんな場に踏み込んだ後で。もし別れたくないと言えば許してくれるのだろうか。

一瞬ぐらりと決意が揺らぎかけた。

……できない。もう十分西條を傷つけた。

ひどいことをした、ごめんなさいと泣いて謝りたかった。でも――

「別れる」

「何故？」

なぜっ？

記憶喪失にでもなったのか、西條は。

「当然でしょう、あんな事の……」

「そうですか」

西條は一切の未練もなく、あっさりと頷いた。

「では、春臣に確認を取ります」

「は？」

止める間もなかった。

既に西條はケータイを耳に当てている。

彩花はうろたえ、やり場のない手をさ迷わせた。

春臣も馬鹿ではないから余分なことは言わないはずだけど。大丈夫だと思う、けど——春臣だし？

「今一緒にいる。別れるって。」

——そう。理由、お前なら見当がつくんじゃないか？

理由なんて昨夜見たことで十分でしょう？

なに考えてるの西條は。

きれいな、でも男らしい顔立ちの中でも一際端正な双眸が彩花を真っ直ぐ見つめている。

彩花は息を飲んだ。

「お前とは——うるさい。後で話をつけてやる」

「なんか、怖いんだけど……」

西條ってこんな風な声出す人だった？

押し殺した低い声。

吐き捨てるように突き放した。

「兄弟仲良くしてって言ったのに——」

西條はケータイをソファに放り投げた。

「先輩のケータイも貸してください」

「は？」

彩花が動く前に鞆から取り出して電源を切ってしまった。

「邪魔されたくないの」

「あの……」

怖い。さっきまでの冷ややかさが嘘みたいだ。

「お、こつてるのは、当然だと思うけど——」

「春臣と取引したから別れるそうですね。おれを実家から解放するために」

春臣の……裏切り者っ。

腕をつかまれ壁に押し付けられた。

恐ろしいのに見とれてしまう。息が苦しい。人形めいた端正な美貌が、感情的になり激しく艶を増す。彩花の目が意図せず潤んだ。

「昨夜がなんですって？」

あんなの、茶番だっですぐわかりましたよ。おれが何度抱いたと思ってるんです。抱かれた後の先輩がどんな風か、欲情した顔や身体がどう見えるか——おれが見間違うとも思いましたか」

ぱっと朱を散らした頬を指の背でそっと撫でて、西條は意地の悪い顔で微笑んだ。

「先輩が弁解しないから事情があるのだろうと大人しく引き上げただけです。」

どんな事情があろうと、他の男の前で服を脱いだ罰は受けてもらいます。——勿論仕組んだ春臣にも」

「だから春臣は仲直りを——」

「高校時代のことでしょう？」

あんなことどうでもいい。ろくに関係もなりたっていない付き合いでした。名前も覚えちゃいない。

言っただでしょう。気が合わない兄弟だっ」

「春臣は違う」

「そうですか」

驚いた。

西條って——。

「心が狭いですよ。」

どうすればわかってくれますか。先輩以外どうでもいいって」

男はどうして本気になるかと獣じみた美しさを滲み出すのだろう。日ごろは洗練された、淡泊な冷やかさか、あるいは害のない穏やかさを纏っておいて。西條のきつい視線に貪られるのは背筋がゾクゾクと痺れるほど刺激的だった。彩花は危うく現実を忘れそうになった。

「……それは、よくない。だって春臣は兄弟で……」

おまけに双子だ。遺伝子レベルで一番近い存在じゃないの？

「西條のために実家を継いでくれるって……」

「先輩を利用して？」

本当に目が離せない。人が良すぎる。

あんな家、継ぐ人間がいなければ放っておけばいい。先輩が気にする必要も、何かを犠牲にする義務もない。おれのために想うなら、おれの傍にいてください」

「でも……でも西條の家族が」

「家族でいてほしいのは先輩だけです」

それって……。彩花が誤魔化すように浮かべた笑みは頬を引き攣らせて消えた。

「擬似家族ごっこ？」

「プロポーズです。結婚しましょう」

西條は即座の回答を望んでいた。

「すべて与えられた百年より、あなたという一日がいい」

彩花の頭は真っ白になった。

だって別れるつもりでここに来たのに。

急激な状況の方向転換に、思考回路がショートしたらしい。

強烈な打撃音が聞こえる。

「……………なにあの音」

「気にしないで」

玄関からだ。ドアが壊れる勢いで誰かが叩いている。

いやいや。管理人が飛んできそうな騒音だよ？

西條は耐え切れないというように壁を一発殴ってから、彩花から離れて玄関に向かった。

「何時だと思ってる。迷惑だ」

玄関のドアを破らんばかりの勢いで乱打していたのは予想通り春臣で、

「お前が彩花に乱暴しないかと心配だったんだ」

駆け込んでくるなり、リビングの壁にぴたりと背中を張り付いたままの彩花を見つけて安堵のため息をついた。

「無事か」

「帰れ。お前との決着は先輩がいないところでつける」

「別にいい――」

言葉を途中にして、春臣はがくつと膝をついた。

西條の動きが早くて、それに春臣の身体の影になってよくわからなかったけど。春臣は腹を押さえて声も出ない様子だ。

西條が本気で人を殴るなんて……。

彩花は益々背中を壁に押し付けた。

「男同士の暴力沙汰を女性に見せるのは避けたい。わかったか」

「……わかった……」

「じゃあ帰れ」

「いやだね」

春臣は腹を撫でながらなんとか立ち上がった。

「今帰るとお前らの仲が深まる気がする」

「お前……やり直したいなんて嘘だろう」

西條の目が冷ややかさを増した。殆ど凍りつきそうな冷酷な蔑視にも春臣は平然としている。

「本気だけど、彩花ともうまくやっていきなくなっちゃって。あー、いて。」

いいじゃん。今夜は三人で語り明かそうぜ。あ、なんなら三人で

ベッドに行くのもあり」

「――先輩」

「はいっ」

彩花は飛び上がった。

西條の笑顔は――怖かった。

「すいませんが、バスルームにでも籠もって耳塞いでいてもらえますか。

耐え切れそうにないので、いますぐこいつの始末をつけます」

「だめっ。だめに決まってるでしょう。春臣も馬鹿なこと言わないでっ」

「ほらー。可愛い彩花を怖がらせちゃだめじゃん。っていうか、殴り合いならオレ負けないけど？」

「殴り合いじゃなくて、報復または断罪、あるいは――虐殺でもいいか」

いやっ。いや、いや。よくない。全然よくない。

誰かつ、助けて――――。

場所は再びクラッシュ、今夜は四人でテーブルを囲んでいた。

ジュリアがにんまりと笑った。

「ゴージャス。二人揃うとさすがに見ごたえがあつてすごい。先輩ありがとうー」

「昨夜邪魔しちゃったし。本当にごめんね」

ジュリアの瞳がきらめくのも当然だ。

絶世の美青年が二人も、それも殆ど同じ顔で揃っているのだから。もう現実世界じゃない。店にいる女の視線を二人で総て攫っている。男としては立場がなくて、誰か絡んでくるかもと警戒したけど。男も見蕩れているんだな、これが。

「話途中だったでしょう。二人きりでなくていいの」

「先輩は心が広い。っていうか、警戒心なさすぎ。自分の男を他の女と密会させちゃだめじゃないですか」

危うく酒を吹くところだった。彩花は喉を詰まらせるようにワインを飲み下した。炭酸に喉がやけた。

「な……っ、ん……お、とこって」

ジュリアは指差して確認しながら、

「西條さんと先輩って付き合ってますよね」
質問ではなく断定だった。

「あたしカンが良いんです」

「魔女の域だよ……」

「だって先輩、みんなに厳しいし、西條さんにもひどいけど。西條さんを見る目は優しいから。西條さんの方はもうかわいくてたまらないって感じ——」

本人を目の前になにを言い出すかこの娘は。

「口塞がれたくなったら黙る」

「もー、恥ずかしがり屋さん」

まずい。

ジュリアの口を縫い付けてでも黙らせたいが、西條の前では口止めは躊躇われた。西條は隠しておきたくないのに、彩花が無理やり沈黙を守らせているのだから。

彩花は無意識にちらりと西條を窺った。

西條はふっとため息をついて、柔らかに微笑んだ。テーブルの下で彩花の手を握る。

「ジュリア、このこと内緒にしてくれないかな」

「どうして？」

「セフレだから？」

「まさか。おれは全社集会で宣言したくらいだけど彩花さんがいやがるから我慢する」

「……西條……」。

「へー、西條さんていい男にしてはちゃんとしてる人ですね。」

たしかに黙ってた方がいいかな。先輩が女の嫉妬で殺されちゃう。つるし上げなんて見たくないしなー」

そうか。殺されるか……。そんな気もしていたけど第三者にズバッと指摘されると心構えができるというか。恐怖が倍増するというか。

「見直しました、西條さん。」

あたし顔いい人って性格悪くて嫌いで」

「そうだよね」

「わかる、わかる」

同意して頷いている双子とジュリア、鏡見たら？

彩花が呆れていると春臣が、

「自覚してる。オレ性格悪いし」

「う……。たしかにちょっと破天荒だけど、短所がない人なんていないし。兄弟想いの良いお兄さんのところもあったりして」

「さすが。この単純な人の良さっ」

彩花を抱きしめようとした春臣は西條に手荒く押しのけられた。

「大人しくする約束は？」

追い出されなくなったら動くな」

双子の仲はそれほど好転してはいない。いきなり大団円とはいかなかったが、核戦争が勃発しそうなピリピリ感は消えていた。残っているとしても中距離ミサイル攻撃程度の緊張感だ。

「やっぱり、地味で真面目で一生懸命な人がいいっていうか。健気なところなんて可愛がりたおしたくなるんですね」

「ジュリアは趣味がいいね。でも先輩はだめだよ。女だしね」

「やだ、あたし男の方が好きですよ。でも先輩見ると、ヤマトナデシコは女とは別モノな気がしてきたなあ。

先輩、西條さんとのこと黙っていてあげるから、ちょっと付き合ってみませんか？」

「ジュリア——その手の挑戦、君が女でも容赦しないけど」

「やーん。こわーい。先輩助けてー」

美形が性格悪い、とは思わないけど。

なんか皆ちよつと変かも……。

「西條も冗談に本気で怒らないで」

「でもコウ、こんな可愛いライバルより気にする相手は別にいるんじゃないの」

春臣はにやにやと笑って、西條の顎に指をかけて自分の方に向かせた。視線は彩花に注がれている。

なんかヤバイ空気が、ひしひしと。彩花は頬を引き攣らせた。叶うなら今すぐ春臣を店の外にたたき出したい。

「前に部屋まで送ってきてた、あの若いのは？」

「な、んの、はなしかな」

「ほらキンパツの。目つきが野生動物みたいな」

「——本当に何の話ですか、先輩？」

西條さんっ……、いい人の仮面外れてますっ。

「ヘンな言い方しないでっ。

ジュンのことでしょう。近所の子。遅くなったとき駅で一緒にな

って送ってくれただけ。それだけ。良い子なんだよ、外見がちよつと派手だけど優しくて」

「あ、その言い方だとガキみたいだけどな。れっきとした男だから。あれは送り狼狙ってたな。間違いない」

「春、臣っ」

「あんた鈍いんだよ。だから周りが警戒してやらないと。嬉しい、喜んでる、幸せ？」

「……地獄に落とされたくらいに……」

「先輩」

身を屈めた西條が耳元に唇を近づけ、彩花だけに聞こえるように囁いた。

「……………」

こっそり囁かれた内容に、彩花は真っ赤になってから青ざめた。

「なんのっ？」

「このバカに唆されておれを捨てようとしたことについてですよ」

「――飲もう」

彩花は飛び上がるように立って、ウェイターを大声で呼んだ。

「今夜は朝まで飲もうねっ」

酒豪の西條を記憶がなくなるまで酔い潰すことが果たしてできるか。運と神様の助けが必要だ。

西條が優しくして悪魔な笑顔で囁いたのは。

『おしおき、今夜しますから』

ワイン＋トニックウォーター 38 (後書き)

最後までお付き合いくださってありがとうございます。

特に間が長く開いてしまったのに、再開早々に感想を下さるなんて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

読んでくれる人がいなかったら、書き続けるのってむずかしい。

ここまで来られたのは応援してくれたみなさんのおかげです。本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317f/>

ワイン＋トニックウォーター

2010年10月8日11時53分発行